

---

your voice, your heart

アレナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

your voice , your heart

### 【Nコード】

N3778Z

### 【作者名】

アレナ

### 【あらすじ】

あなたの声を聞いてから2年。低く響くその声に、わたしの耳と心はノックアウトされました。わたしは、あなたの声と心が欲しくて欲しくてたまらないのです。純情一直線な薬師と、超絶無口な武官さんのほのぼの王宮ラブストーリー。

## わたしのお仕事

「ありがとう」

たった一言。ゆったりと、低く響くその声に、わたしの耳と心はノックアウトされました。

あなたの声を聞いてから早2年。

わたしは、あなたの声と心が欲しくて欲しくてたまらないのです。

今日もこの王国は平和です。

「どーいーてーくださいーい」

大きなカゴに視界をふさがれ見えないわたしは、そう言いながら王宮の中庭を歩いていく。

さっ、と侍女の皆さんや、文官・武官の皆さんが避けてくれる様は、ちよつとした快感に浸れる。まるで自分が偉くなつたかのよう。いや、実際はそんなことないのだけれど。多分みんなわたしとぶつかつて、このカゴの中身（たくさんのお草）をぶちまけられるのが嫌なだけなんだろうけど。

その証拠に、わたしの横で一体どのようにして避けようかと右往左往している方々の目は、なぜか戦々恐々としてわたしを見ている。……まあ、実際何度かやったことあるし、王宮の皆様方に恐れられても仕方ないか。

わたしのお仕事は、決して薬草運びではありません。これは、わたしの職業。つまり、薬師の下っ端としての大事な大事な雑務なのです。

わたしの師匠であるラーラ様はもう70代のおばあさま（こんなこと面と向かって言ったら師匠に殺される）で、この大量の薬草を王宮の倉庫から薬師室まで運ぶのは不可能だし。わたしは薬師試験に合格して5年目とはいえまだまだ新米だし。

だから、仕方ないのだ。わたしだってしたくてこんなことしているわけではないのだ。このくっさい薬草を、片道10分もかかる道を運んでいくなんて。

なんだってこんなに王宮は広いの。嫌がらせだ。経費の無駄遣いだ。せめて倉庫と薬師室を隣り合わせにしてくれたらいいのに、なぜ王宮の端から端なんてそんな鬼畜なことを。

ぶつくさ文句を言うわたしは、さぞや不気味だったことだろう。それに加えものすごい臭いをはなつ薬草を抱えているのだ。誰もが周囲5メートル以上離れているのは当たり前である。20歳の乙女としては悲しい限りだ。

しかしわたしは言いたい。みんな怪我したときにはこの薬草をすりつぶした薬にお世話になってるじゃないかと。臭いが軽減するようわたし達薬師が気を配っているだけで、この薬草がなかったら、その侍女さんのヤケドだって文官さんのペンダコだって、武官さんの切り傷だって治っていなかったのだぞ、と。

薬師って、裏方なんだよなあ。ちえ。

そんなことを思いながら、そろそろ薬師室に着く、と一瞬気を抜いたときだった。

「あ」

そこに、小さな段差があるのを忘れていた。通いなれた道なのに。

王宮勤めになつてからというこの1年間、ほぼ毎日歩いているのに、  
ばかばか、わたしのばか、とり頭。

わたしがいくら自分を責めても、重力はわたしの味方をしてはく  
れなかつた。

ばさり、と大きな音がして、わたしが抱えていた大きなカゴとそ  
の中身は宙に放り出されたのであつた。

わたしのお仕事（後書き）

新連載です。

ほのぼの、のんびり、ファンタジーな恋愛小説。

## 薬師のお仕事

わたしは昔、大きな病を患ったことがある。その時わたしを助けてくれたのは、両親とお医者様、そしてずっとずっとわたしの病が完治するまで面倒を見てくれ、薬を処方し続けてくれた薬師さまだった。

だから、わたしはなろうと思った。人を助け、希望を与える薬師に。

「……またやったわ」

「今日もぶちまけたわね」

「なんと悲惨な」

「学習しない薬師だな本当に」

聞こえる。王宮勤めの皆さんの心無いそして辛辣な会話が。

みじめな思いをしながら、わたしは見事にぶちまけた薬草を静かに拾い始めた。

決していじめられてるとかじゃないのだ。ただ単にわたしがなぜか そう、なぜか！ 日に一度はこうして薬草をぶちまけたり中庭の池に落ちたり茂みに突っ込んだりしているから皆さん呆れているだけなのだ。

ええ、認めます。認めますとも。自分が他の人に比べて少々鈍くさいということは。

だからって薬草拾うの手伝ってくれてもいいじゃないか。多少衣服が薬草くさくなるくらいなんだって言うのだ。

薬師になるためには、まずはじめに薬師のための学校に行く必要がある。子供の頃から薬師を目指していたわたしは、受験資格の与えられる12歳になったとき、その学校を受験した。そして、なんのまぐれか合格。3年間、青春の全てを注ぎ込んでそこでみっちり学んできた。

そして15歳になったとき、卒業試験を兼ねた薬師試験に受かり、わたしは晴れて「薬師」という国家資格を手に入れたのだ。

卒業後は、城下にある薬師院で、先輩につきながら勉強したり薬を処方したり、忙しくも充実した毎日を過ごしていた。

運命が変わったのは卒業してから3年後。つまり今から2年前。わたしは超難関とも言われる王宮付きの薬師になるためそれはもう猛勉強をし、1年後に実を結んだ。そして今、こうして下っ端としてではあるし、毎日薬草運びとかの雑務を仰せつかってはいるけど、それでも王宮内の薬師室で、天才薬師のラーラ様指導の下立派に（多分）薬師として働いている。

しかし、こつも薬草運びが辛い仕事だとは思わなんだ。なぜ精神的に辛いんだこの仕事。

そんなことを思いながら腰をかがめ、薬草を一枚一枚拾っている。

突然、目の前に薬草の束が差し出された。

「え？」

臭いと評判のこの草に触ろうとしてくれるひとは、この王宮内でも一握りだ。嘘、と胸の鼓動を感じながら差し出している腕の先を見やれば、そこにはいたのは見知った武官の男性。

まるで美しい漆のような色の髪と、黒曜石のような鋭く輝く瞳を

持つ彼。

「グラウチカ、様」

わたしの愛する、その人だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3778z/>

---

your voice, your heart

2011年12月17日01時56分発行